

九条ブログはらまち

「はらまち九条の会」ニュース No. 4 3

2007(平成19)年11月12日(月)発行

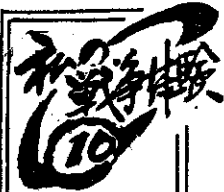
<1948(昭和23)年11月12日は、東京裁判の判決が下った日> 2年半の裁判を経てウェブ裁判長はA級戦犯として、東条英機、広田弘毅、土肥原賢二、松井石根、板垣征四郎、木村兵太郎、武藤章の7名に絞首刑の判決が下る。やがて7被告に12月22日夜半、刑が執行された。



ゆず
柚

このニュースは <http://sousou9.web.fc2.com> あるいは「相双地区九条の会フォーラム」

さらに「はらまち九条の会」で、1号から全号を見ることができます。



軍属として原町飛行場に勤めました
原町区馬場 中野目利次

大正十五年生まれ、八十一歳

私は一九二六(大正十五)年十一月十一日、原町区馬場のこの家で生まれ、今年八十一歳になります。

石神第一高等尋常小学校(のちの国民学校・現在の小学校)を昭和十四年三月に卒業し、相馬農蚕学校(現在の相馬農業高校)などに進学しなかったのですが、当時は家が貧しくて進学もできず、押釜の砂工場やあちこちで働きました。私は草履を履いているのに、友人の農蚕学校生は、足に格好よくゲートルを巻いて立派そうであらやましく思ったりしたものです。

家の近くに飛行場ができて

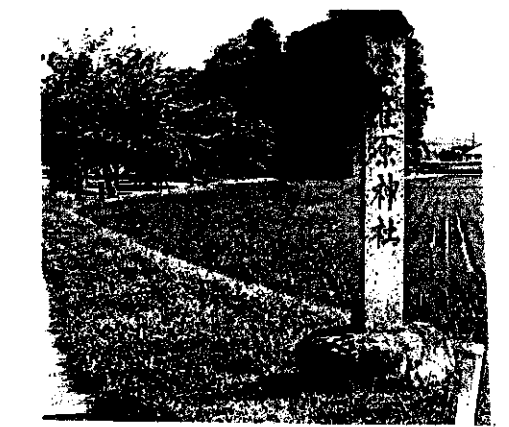
昭和十四年四月、私の家のすぐそばに雲雀ヶ原飛行場ができ、翌年「熊谷飛行学校原町分教場」として開場します。(※飛行場の名称は次のように変更。「三重明野飛行学校教育科第一中隊飛行場」「茨城水戸飛行学校第三中隊飛行場」「茨城鉾田飛行学校第二中隊飛行場」。また飛行場建設のため、突然、軍の厳しい命令で移転させられた農家が六九戸もありました。

記録係として終戦まで働く

進学できず友人の群れからはぐれたような私でしたが、家族のすすめでこの原町飛行場に勤めるようになったのです。軍属(※軍人でなくて軍に所属する文官や文官待遇者)として勤め、同時に十四、五人が採用されました。上の人からの指示で、整備班の事務室で記録係をやることになったのですが、小学校卒の十二、



▲原町陸軍飛行場の正門



▲米軍機の銃弾で壊された跡が残る雲雀ヶ原航空神社の石柱(石柱の題字揮毫は、熊谷陸軍飛行学校長若下新太郎陸軍中將、と中野目さんは話されています)

三歳でしたから、何をやるのか、何が何だかさっぱり分からず、出入りする人は大尉や准士官の偉い人ばかりで、「言われたことをやれ」と命令され、本当に閉口しました。できてもできなかったも、とにかく訓練飛行機の識別マークを見て、どういう飛行機か、教官や学生の誰が乗り、いつ地上滑走し、飛行時間などの飛行演習の記録を一生懸命やりました。一機ごとの飛行機の履歴簿に、走行記録も部品の交換などもしっかりと記録しました。

記録は毎月整理し搭乗日誌に清書して、分隊長に提出し認印をもらい、本校の部隊長に送ります。でも、戦況も悪くなり、特別攻撃隊に行くようになって、記録も二義的になりました。とにかく私は、昭和十五年六月から、終戦の昭和二十年八月十五日の後、残務整理で十月頃までの五年間、原町飛行場に勤めたことになりました。飛行場には全国からの学生が五十人以上いました。私のいたところは第二格納庫と第三格納庫の間の飛行班という部屋で、今は亡くなりましたが気象班の青田信一さんと机を並べていました。(※青田さんは戦後原町の駅通りで洋品店を開き、飛行場での経験を手記としてまとめたり、見取り図《裏面参照》を作るなど貴重な資料を残されています)

学属(大学生)から勉強を教わる

一番覚えていっているのは、上官から冗談に「唐変木(とうへんぼく)」とか「えへら、えへら」と言われたことです。小学校卒だけで何も分からず、その「唐変木」が「まぬけ」という意味だということも、初めは知りませんでした。

私は自分が小学校卒だけで惨めな学歴と自覚し、学属(がくしゅう)と呼ばれていた大学生の訓練兵から勉強を教えてもらいました。「教程」という教科書を使い、数学や国語や歴史を、毎日一時間ぐらい教えてもらったりしました。

○写真と地図は次の図書からコピーさせていただきました。・二上英朗『遙かなり雲雀ヶ原』『原町空襲の記録』・原町飛行場関係戦没者慰霊顕彰会『嗚呼原町陸軍飛行場』『あかねぐも』・2007.5.16『福島民報』

(表のページより)

一本杉に衝突した飛行機のこと

昭和十九年十月のことです。原町飛行場に、名古屋から日立かどこからか、一人乗りの飛行機が迷って飛んできて着陸しました。パイロットは降りてきて、「ここはどこですか」と聞きますが、演習指揮官から「何を言ってるんだ！」と激しく怒られ、殴られました。でも原隊に戻るために飛び立たなくては行けない。ところがその飛行機は新型機で、使用燃料はオク単価九二という種類で原町飛行場にはオク単価八七という種類しかありません。そこで整備隊長の田辺武雄大尉が自ら、ノズルの調整をしてみました。

でも原隊に戻ろうと飛び立ちますが、筒外爆発を起こし旋回し、押釜の杉本さんの屋敷の裏にあった「一本杉」に激突し大破します。パイロットは亡くなったと思います。私は記録係で、その事故直後の写真を持っていましたが、野馬追の里博物館に寄贈しました。杉本さんの家も大きく破損しますが、家には女の赤ちゃんがいちこの中に入っていました。が、奇跡的に無事でした。

特別幹部候補生を勧められるが

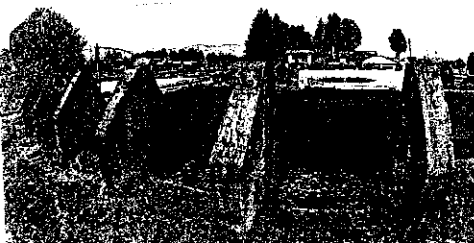
私は五年間も軍の飛行場について、兵隊検査で甲種合格していましたが、兵隊にはならないで終わりました。でも一時、特幹（とつかん）と呼ばれていた特別幹部候補生にならないかと勧められました。父が四二歳で招集されてフィリピンに出征し、家には祖父と母と兄弟だけだったので、私は応募しませんでした。兵隊にならなくて良かったと思います。

激しかった八月九・十日の空襲

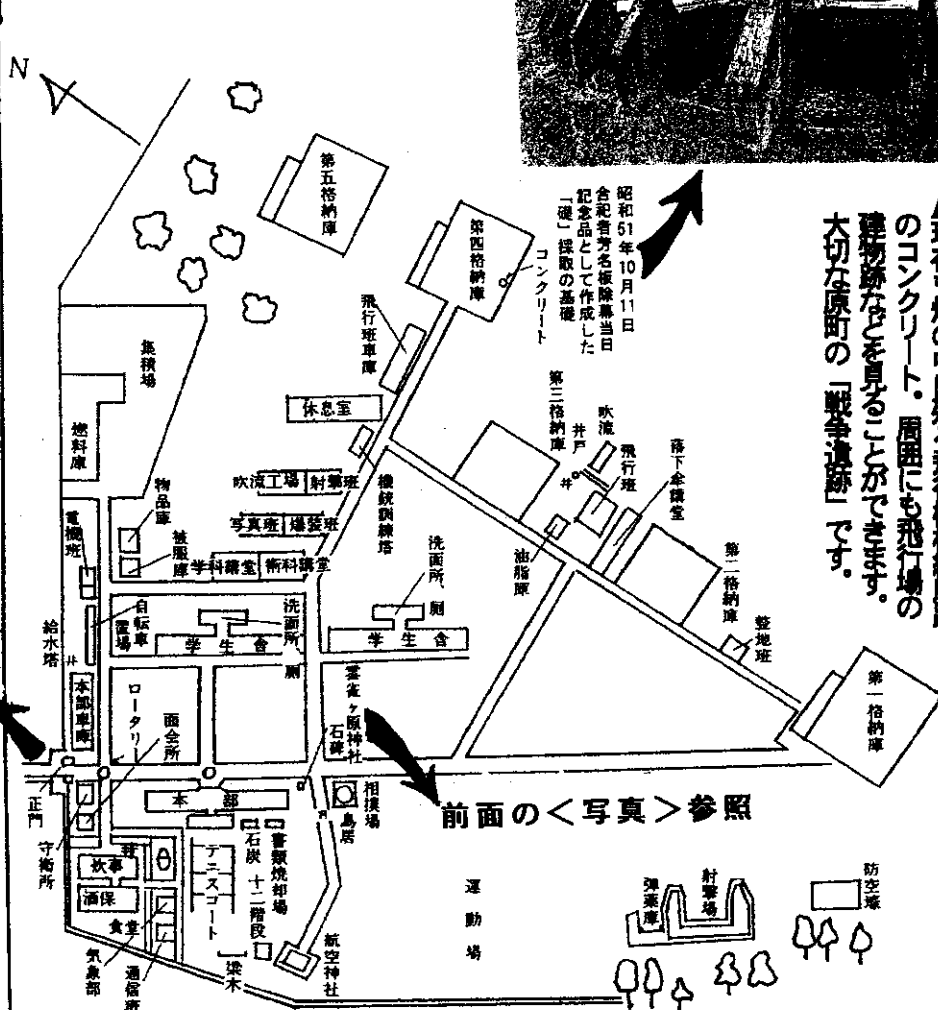
原町は終戦間近の昭和二十年八月九日と十日、ひどい米軍の空襲がありました。近くの前町紡績工場も飛行場もずたずたに攻撃さ

れました。飛行機は掩体壕（えんたいこう）にかくしたりしました。松の木の上に監視廠（所）を作っていました。敵機が空襲してきて逃げ出した人めがけて機銃掃射で激しく狙ってきます。私も竹藪に逃げますが、これが本当に恐ろしかった。竹藪は安全なようですがとんでもない。機銃掃射の弾が竹に当たってはね返り、ピュウピュウと音をたて、どこに弾がいくか分からないのです。十日の午後、雷雨になり、敵機は海のほうに飛び去り、空襲は終わります。

▲現在も畑の中に残る飛行機格納庫跡のコンクリート。周囲にも飛行場の建物跡などを見ることが出来ます。大切な原町の「戦争遺跡」です。



陸軍原町飛行場見取り図
昭和15年当時 提供 青田信一



終戦の頃の飛行場には、寄せ集めの品の不完全な飛行機ばかりが三十機ぐらい残っていました。戦後になって進駐軍がやって来た時、意にそうように飛行機を並べておきました。その粗末な飛行機に米兵は呆れかえっていました。戦争は良くない。こんなひどくて悲しい思いは、二度とさせたくないと思っています。
(十一月四日談・文責 事務局山崎)

- 今回で10回目の「私の戦争体験」は、馬場の中野目利次さんを訪ね、貴重な体験をうかがいました。11月4日(日)午前、中野目さんは、昭和19年11月6日特攻隊で戦死された志賀敏美さん(原町区馬場出身)の慰霊祭に出席されていて不在でした。午後再度訪問すると、快くニコニコと懐かしそうにお話してくださいました。
- 中野目さんは、原町飛行場の開校から廃校までの5年間飛行場に勤務され、内部の様子を知る大切な最後の方と思われる。今回は30分ほどの聞き取りでしたが、さらに記録としてしっかり聞き取っておく必要を感じました。
- お話しも終わり広い屋敷の庭に出ると、たわわに実った「柚子」の大木が目につきました。そしてわざわざ梯子にのぼり、数個の「柚子」をもち、私に手渡してくれました。今もその「柚子」を夕食の時などに味わっています。